

## 泉山（いづみやま）磁石場

地元の言い伝えによると、泉山磁石場は 1600 年代の最初の数十年間に朝鮮人陶工・金ヶ江三兵衛（かながえさんべえ）（1655 年没）によって発見されたと言われている。三兵衛が発見したのは磁石（じせき）というもので、これには磁器に欠かせない原料であるカオリナイトという白色のアルミノケイ酸塩粘土が含まれている。泉山で採れる磁石の成分は、カオリナイト、セリサイト、長石、石英の他、少量の酸化鉄で、酸化鉄によって石の表面は黄色味を帯びている。この磁石場のおかげで日本で初めての磁器の大量生産が可能になったため、佐賀（さが）藩主の鍋島（なべしま）家にとって、この場所は重要な供給源となった。鍋島家は、泉山が中心にあった内山（うちやま）地区を出入りする道を塞ぐように番所を設けて磁石場を厳しく見張り、佐賀藩の許可のない者は誰も通ることが許されなかった。

磁石場として使われる以前の泉山のもともとの大きさについては記録が残っていない。現在の形になるまで山は徐々に切り出されていった。200 年以上にわたり、石の切り出しは手作業で行われており、日本の開国と 1868 年の明治維新の後により機械が使われるようになった。そして、1897 年には約 10,024 トンの磁石が泉山磁石場から切り出された。泉山で現在も 2 つの採掘坑の内部では、採掘道具でつけられた跡を今も見ることができる。

泉山は 1980 年に国の史跡に指定され、1995 年まで採石場として活動的に使われていた。

1800 年代初めに、有田の窯元は熊本（くまもと）県の日田（ひだ）で高品質の磁石を購入し始めた。現在の有田焼の大半にはこの日田の磁石が使われている。